

1 巻頭言 ～「親の力」をまなびあう学習プログラムについて～

親の教育力を高めるプログラム開発検討委員会委員長（安田女子短期大学教授） 橋本 信子

昨今、親の教育力低下やモラルの低下を裏付けるかのような出来事が頻発しています。子殺しや虐待に始まって給食費未納に至るまで、“いまどきの親”を象徴する出来事は枚挙に暇がありません。プログラムを開発するにあたって、“いまどきの広島県の親”に対する共通理解を図るため、委員全員で広島県教育モニターアンケートを拝読いたしました。記述式回答には、子どもを育てている親たちが誰によって助けられ、何を学んだかが記されており、多くの人が親への関わりを通して子育てに参加している実態が明らかにされていきました。「近頃の親はなっていない」「親の務めを果たしていない」など、“いまどきの親”には耳の痛い言葉が発せられています。しかし、教育モニターアンケートに見られるような、子育てに真摯な態度で向き合っている人が多く存在していることも心に止め、プログラム開発にあたりました。

子育てに喜びや楽しみを見いだす姿は、他者と対話し、励ましやアドバイスを受ける過程で出現している例が多いことから、学びたい・支えたいと思う人に語り合う場を提供することで、親の教育力向上が図られるのではないかと考えました。この考えによって、教授型学習プログラムではなく参加型学習プログラムの開発を目指すことになり、指導・伝授者タイプのインストラクターや専門家ではなく、促進・媒介者タイプのファシリテーターが進行役を務める実施方法を選択することになったのです。

さて、『「親の力」をまなびあう学習プログラム』という名称の「親の力」とは何を示しているのでしょうか。一般的に、「親の力」とは、“子の教育について第一義的責任を有する者”が、わが子に発揮している教育力を指しますが、子どもを育てる責任を有しているのは親だけではありません。社会も“社会の宝”である子どもの育成にあたる責任を担っています。わが子に対して第一義的責任を果たす力と社会の一員として子どもを育成する力が一体となった“子育て力”，つまり、人を育てようとする人なら誰もが持っているであろう“親心”から発せられる力を、本プログラムでは「親の力」という言葉で表現しました。真の「親の力」とは、常に良い方向へ導くものであるという前提に立ち、だからこそ“まなびあう”ことができるのだという思いがプログラムの根底に流れています。

本委員会は、このプログラムにひとつの願いを託しています。それは、プログラムの実施をきっかけに、点在する「親の力」を集結させ、学び合いと支え合いのなかで明るい子育て社会を構築していただきたいという願いです。時代は、多くの世代が子育てに関わっていくことを求めています。このプログラムをまずは同世代間の取り組みとして定着させ、さらに異世代間で交流できるプログラムに発展させていくなれば、子育ての知恵が世代間で受け継がれる機会にもなり、よりよい子育て環境を次世代へ継承するシステムが形成されていくと考えています。子育てに関わる人間が子育てに疲れ切っている社会に未来はありません。広島県に暮らす人々が、子育てを通して実感する豊かさや幸福感、それがこのプログラムによってもたらされ、社会全体で“いまどき”の子育てを再構築し続ける取り組みになることを願ってやみません。

今回提示するプログラムは、8段階3つずつの計24ユニットで構成されていますが、あくまでも基本形です。県民の皆様のニーズに対応できる新たなユニットを、今後ご提示できるよう努力してまいります。『「親の力」をまなびあう学習プログラム』が社会に定着したプログラムになっていくためには、多くの方のご指摘やご提案が必要です。忌憚のないご意見を頂戴し、まなびあう楽しさで子育ての輪が広がり、交流を深めるなかで「親の力」が高められるプログラムに改善してまいりたいと思っております。

最後になりましたが、『「親の力」をまなびあう学習プログラム』のために、ご指導、ご支援を賜りました関係機関、団体等の皆様に心から御礼を申し上げます。